古代日本海文化改題

古代史の海

第69号　2012年9月　目次

【巻頭言】
方位データは資料になりうるか……尾関　章　表2
「任那四県」割譲と韓国の前方後円墳……鮫島　彰　2
ワニ考……野田昌夫　35

会員ひろば【小休止】
継体―倶に崩薨す……渡部正路　48
アンデス通信㉒……市木尚利　51
【論文紹介】上川通夫著「ヤマト国家時代の仏教」……河越尚司　54

片岡宏二『邪馬台国論争の新視点』を読む……中村　修　63
巻頭言補筆……尾関　章　79
御輿塚古墳　大正11年の石碑建立に関する公文書……重村英雄　95
編集後記　99
イラスト……髙橋信夫

ISSN 1341-5522

古代日本海文化 改題

古代史の海

第69号　2012年9月

【巻頭言】
方位データは資料になりうるか……尾関　章
「任那四県」割譲と韓国の前方後円墳……鮫島　彰
ワニ考……野田昌夫

会員ひろば【小休止】
継体―倶に崩薨す……渡部正路
アンデス通信㉒……市木尚利
【論文紹介】上川通夫著「ヤマト国家時代の仏教」……河越尚司

片岡宏二『邪馬台国論争の新視点』を読む……中村　修
巻頭言補筆……尾関　章
御輿塚古墳　大正11年の石碑建立に関する公文書……重村英雄

「古代史の海」の会

ワニ考

野田昌夫

一、はじめに

『古事記』に見える因幡の白兎や、『古事記』『日本書紀』に見える海幸・山幸の説話などにはワニが登場する。また、いくつかの風土記や風土記逸文の中などにもワニが散見される。

これらのワニについては、これがサメ（フカ）であるとする説が現在では主流となっているが、やはりワニは爬虫類のワニであるとする説や、ワニはシャチであるとする説など、色々な考え方も存在する。

ただ、今まで論じられてきたところをみると、何れの説でも、ワニという言葉が単一種類の動物を表すものであるという前提に立って検討されてきたようである。

ここにおいて私は、ワニは単一の種類の動物をさす言葉ではなく、「どう猛な水中動物は、一括してすべてワニと呼ばれたのではないか？」という観点に立ってこの問題に取り組んでみた。

そうすると、ワニの中にサメ（フカ）も、シャチも、爬虫類のワニもすべて含まれることとなる。そうして、ワニにまつわる色々な説話において、その説話の内容に応じて最も相応しい動物を、これらの中から選ぶことができることとなる。

ここでは、まずはじめに従来行われてきた主な説を概観することとし、その上で拙論を展開することとしたい。

二、本居宣長先生はワニ説

『古事記』には「因幡の白兎」と「海幸・山幸」の両方の説話があり、ここではワニはすべて「和邇」と記されている。

本居宣長先生（一七三〇～一八〇一）が著した『古事記伝』「稲羽の素菟の段」では、「菟」が「和邇」に毛皮をはぎ取られるのであるが、この「和邇」について、

（二A）「和名抄に麻果が切韻に云く、鰐は鰐に似て四足有り、喙の長さ三尺甚齒は利とし、虎及び大鹿水を渡れば、鰐之を撃て皆中断すと、和名和仁と云り。」

（二B）「熊鰐とは、その猛きことを云る稱なり。凡て熊某と云は、みな猛きを云る例」

（二C）「海の和邇を欺きて言ひしく」という原文に対しては、「海と云るは、菟は陸の物にて、海を渡らむの謀を語る處なればなり。」

（二D）「宇治拾遺に、虎の海へおちいりける足を、和邇のくひきりけるを、その和邇つひに虎にくひ殺されたる物語をのせたり。」

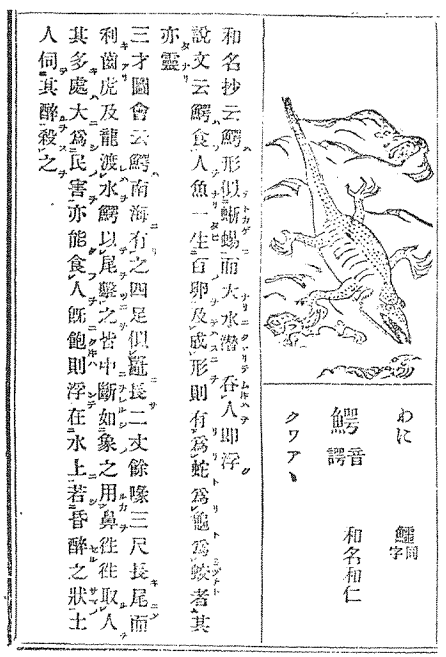
などと書いている。

『和漢三才図会』という書物がある。一七一二年頃に出版された江戸時代の図入り百科事典である。下段に示した図は、寺島良安『和漢三才図会』巻第五十二　中外出版社明治三十四年七月　の「鰐」の項を写したものであるが、トカゲに似た四足の鰐が描かれている。

宣長先生の年譜を調べると、宣長先生はこの『和漢三才図会』も読んだことが記録されているから、このような「鰐」に関する知識も持った上で、「和邇」は「鰐」であるとしていたものと考えられる。

次に『古事記伝』「鵜羽産屋の段」を見てみよう。これがいわゆる海幸・山幸の説話である。

山幸彦（＝ホオリノミコト）の妻のトヨタマヒメが子供を産むことになって、海辺の渚に鵜の羽を葺草にして産殿を造った。トヨタマヒメは「私が産むところを見ないでください」と言って産殿に入ったのだが、山幸彦はそっと産殿の中を覗いてみた。



すると、「八尋和邇に化（な）りて、匍匐（は）ひ委蛇（もこよ）ひき。」という様子を見てびっくり仰天。一方、海神の娘であるトヨタマヒメはこのような姿を見られたことを恥じて海へ帰っていってしまった。

これについて本居宣長先生は次のように述べている。

（二E）「八尋和鰐はいと大きなる鰐なり。」

（二F）「匍匐はハヒと訓べし。」

（二G）「委蛇はモコヨヒキと訓べし。」

（二H）「ここは匍匐委蛇をば、軽く見べし。ただ鰐になり

給へる形状を云るのみなり。」

（二Ｉ）「書紀のある注に、産時のなやみのさまを云、と云るは、わろし。」

すなわち、ここでも「和邇」は「鰐」であるとしている。

また、内科・小児科の医者であった宣長先生は、出産についてもそれなりの知識と経験を持っていたことであろうが、「ハヒモコヨヒキ」という表現を出産時のありさまであると考えることには反対しているのである。

三、現在はサメ（フカ）説が主流

岩波書店の日本古典文学大系の『古事記・祝詞』、『日本書紀』、『風土記』では、総じてワニをサメ（フカ）というように考えているようだ。

（三Ａ）『岩波　古語辞典』の「わに」の項には、

サメ類の古名。出雲・隠岐島方面では、サメ・フカをワニという。

とあり、また、『日本古代史大辞典』大和書房　二〇〇六年の「わにし［和珥氏］」の項には、

（三Ｂ）「ワニ」はフカ（大形のサメ）。西日本では、現在もフカを「ワニザメ」「サメ」と称している。

とある。

このように、ワニはサメ（フカ）であるという考え方が、現在では主流になっている。

四、サメ（フカ）説の代表例・西宮一民説

前章に述べたように、現在はワニはサメ（フカ）であるという考え方が主流になっているので、その論拠をもう少し詳しくみてみよう。

ここではその代表例として、西宮一民先生の説を紹介することとしたい。（注1）

ただ、この説の内容については既に充分ご存じの方もおられようし、また、できるだけ先を急いでこの拙稿を読み上げたいという方もおられよう。

そういう方々は、取り敢えずこの章は飛ばして次の章へと進み、後ほど必要に応じてこの章に戻ってみるということにして戴いてもよろしかろう。

西宮一民説の概要は、おおよそ次のようである。

（四Ａ）山陰地方の方言でサメ（フカ）のことをワニと言うので、古事記の「稲羽の素兎」に出てくる「和邇」はサメ（フカ）のことだと言われている。

（四Ｂ）日本では爬虫類のワニはいなかったというのが、「和邇」をサメ（フカ）と解させることになった理由である。

（四Ｃ）これに対して次のような反論が想定される。

（四Ｃ１）「菟と鰐」のような類型説話は南洋諸島にもあって、それが日本に渡来したものとすれば、その「鰐」は爬虫類である。

（四Ｃ２）記・紀ともに豊玉姫が出産にあたって、海浜で「匍匐（は）ひ委蛇（もこよ）ひき」と表現しているのは、サメ（フカ）とは考えられず、爬虫類の「鰐」の方がふさわしい。

（四Ｄ）このような反論に対して、おおよそ次のように考える。

（四Ｄ１）『出雲国風土記』嶋根郡・栗江の埼の条で、中海の特産として、「入鹿（いるか）・和邇（わに）・鱸（なまし）・須受枳（すずき）・近志呂（このしろ）・鎮仁（ちに）・白魚・海鼠（こ）・鰕（えび）・海松（みる）」などがある。この「和邇」はサメ（フカ）を想像させるものであって、爬虫類のワニとは思えない。

（四Ｄ２）海幸・山幸説話における「匍匐（は）ひ委蛇（もこよ）ひき」という表現は、腹這いながらくねくねと蛇行するという意味である。これは出産における女の姿態の常套表現なのであって、爬虫類であることを主張する根拠にはならない。

（四Ｄ３）『古事記』では「鰐」という漢字は使わず、すべて「和邇」（ワニ）という仮名書きで統一している。これは、ワニが漢籍に見える「鰐」と解される危険性を避けて、ワニザメを意味するところのワニという和語をもって表現しようとしたものである。

（四Ｄ４）「鰐」という漢字をワニと訓むのは、漢籍に見えるワニが日本にはいなかったから、その性質の狂暴さが共通するところを取って、漢字「鰐」については和語のワニをもってその訓としたのである。

（四Ｄ５）「海の和邇（ワニ）という表現がある。これは、河川や沼に棲息する爬虫類に比べて、「海の」を冠するが故に、ワニザメのワニと決定できるのである。

（四Ｄ６）『文選』左思の呉都賦の劉注に、「鰐」という漢字について次のように書かれている。

「鰐魚、長二丈余、有四足、似鼉、喙長三尺、甚利歯、虎及大鹿渡水、鰐撃之、皆中斷、広州有之。」

これによると、「鰐」はどうやら亀甲類である。この劉注がそのまま『和名抄』に引きつがれているわけだが、そこには「似鰲」とあるから、まさしく亀甲類として理解されていたことになる。

おおよそ以上のような論旨で、ワニはサメ（フカ）であるとしている。

五、シャチ説という卓見

大山元『古代史料に見る縄文伝承』というユニークな書物がある。（注2）

この書物の【1・1　因幡の白兎】の項に、左記のように、ワニはシャチであるとする説が展開されている。

（五Ａ）『壹岐國風土記』逸文に、次のような文章がある。

鯨伏郷　壹岐の國の風土記に云はく、鯨伏の郷　昔　鮐鰐、鯨を追ひければ、鯨、走り来て隠り伏しき。かれ、鯨伏と云う。

（五Ｂ）アイヌ語には iso-yanke-kamuy（獲物を・陸に上げる・神）と呼ばれる海洋動物がある。これはホロベツで採集さ

れた語で、この「獲物」とは「鯨」のことである。

（五C）言語学者・知里真志保の『分類アイヌ語辞典動物編』では、iso-yanke-kamuy を「シャチ（鯱）」であるとしている。

（五D）つまり、昔の壹岐でも近世のホロベツでも、ある海洋動物が鯨を浜にまで追い上げてくるということが観察されていて、その動物を往時の壹岐ではワニと言い、アイヌ語では iso-yanke-kamuy と言い、現代日本語ではシャチというのだ。

（五E）すなわち、鯨を追う「ワニ」とは、今でいう「シャチ」のことらしい。

この大山元氏の説は、アイヌ語を介してワニはシャチであるということを主張しているのであるが、シャチの生態までも踏まえた卓見であるといえよう。

六、ワニの中にはシャチもいる

以上、従来からのワニに関する諸説を概観したが、次にいよいよ私の考え方を記すことにしよう。

まず、前章に述べた、ワニはシャチであるという大山元氏の説を、シャチの生態という観点から補強してみよう。

シャチは、哺乳綱・クジラ目・マイルカ科・シャチ属に属する水中動物である。学名をオルシヌス・オルカと言い、哺乳動物であって魚ではないが、海中を泳ぎ回る。

英語ではキラー・ホエール（殺し屋の鯨）と言って、どう猛なことで知られている。鋭い歯と丈夫な顎を持ち、集団で組織的な狩りをする知恵をもっている。

オーストラリア南東端のトゥーフォルド湾では、二十世紀初頭までの約百年間、シャチの群れが大型のヒゲクジラを湾に追い込み、これを人間のクジラ捕りが銛を投げて仕留めるという、人間とシャチとの共同作戦による捕鯨が行われていたという。この時、シャチはその分け前として大好物のクジラの舌だけを食いちぎって泳ぎ去り、あとの部分は人間に任せるという、無言の相互協定ができていたらしい。（注3）

また、老練なシャチは、波打ち際にいるアザラシを襲うこともある。下手をするとシャチ自身が岸に打ち上げられて海に戻れなくなるリスクがあるのだが、渚に打ち上げる波を巧みに利用しながら知恵と卓越した運動能力を駆使してこのような狩りをすることもあるのである。

シャチは、普通は人間を襲うことは少ないが、カナダの「シーランド・オブ・ザ・パシフィック」で、誤ってシャチのプールに転落した若いトレーナーが、シャチに水中を引きずり回されて殺されたという事故も実際に発生している。（注3）

『壹岐國風土記』逸文にあるワニは、鯨を追いかけているところからみて、サメ（フカ）のことではなく、このような習性を持つシャチと考えるのが妥当であろう。

壹岐郷土館長であった野本政宏氏も、「壹岐の島においては、この鰐は、多分、サカマタ（シャチ）のことだろうと、

いわれています。」と述べている。（注4）

以上のようにくどくどしく述べるまでもなく、シャチをよく知る人達にとっては「クジラを追いかけるのはシャチ」ということは常識となっているようである。

これらのことを考え合わせると、今まで全般的にワニはサメ（フカ）であるというように言われてきているが、少なくともこの『壹岐國風土記』逸文にあるワニについては、その行動・生態からみて、サメ（フカ）ではなく、シャチであることを認めざるを得ないであろう。

そうだとすれば、ワニと言う言葉は、サメ（フカ）に限定される言葉ではなく、シャチをも含む言葉としてとらえるべきである。

言い換えれば、ワニという言葉は、ただ一種類の魚を指す言葉ではなく、「どう猛な水中動物」全般を総括的に指す言葉と考えられるのである。

奈良文化財研究所の木簡データベースによれば、藤原宮や平城宮の跡などからサメ（佐米）と書かれた木簡がすでに四十点余りみつかっている。これからみて、記・紀の編纂当時にはすでにサメという言葉があったことは確かだが、それにもかかわらず記・紀にはサメという言葉は使われていない。これは、当時ワニとサメとは別の言葉であると認識されていて、「説話にあるワニは、やはりワニと書くべきである。」と考えられていたからではなかろうか。

七、『日葡辞書』ではワニとサメとは別のもの

『日葡辞書』という書物がある。（注5）これは日本語をポルトガル語で解説した辞典である。一六〇三年～一六〇四年に日本イエズス会によって長崎で刊行されたもので、すべてポルトガル語で記述され、約三二、〇〇〇語を収録している。

ポルトガル語部分を現代日本語に翻訳した『邦訳日葡辞書』が一九八〇年に岩波書店から発行されている。私はポルトガル語は知らないので、この邦訳版を繙いて見ると、その内容の充実していることに驚かされる。

一六〇三年と言えば、徳川家康が征夷大将軍になって江戸幕府を開いた年である。このような時に既にこのように立派な外国語の辞書が刊行されていたということはまことに驚きであるが、この辞書のお陰で当時の日本語がどのようなものであったかがわかる事例がある。

例えば、

a　サブライ／サムライ（侍）は「貴族、または、尊敬すべき人」であり、ブシ（武士）は「軍人」であると、意味が区別されていたこと。

b　「日本」の読みには、「にほん」（にふぉん）、「にっぽん」、「じっぽん」の三通りがあったこと。

c　当時の日本では、「せ」と「ぜ」は「シェ」と「ジェ」というように発音されていたこと。

などがあげられる。

それでは、サメ、フカ、ワニはこの辞書でどのように書かれているかというと、次の通りである。

d　サメ（鮫）　鱣（えい）あるいは鮫（さめ）のような魚の一種。

e　フカ（鱶）　鮫の類。

f　ワニ（鰐）　この名で呼ばれる、人間を食うという魚。

すなわち、この辞書では、ワニ＝サメ（フカ）ではなく、ワニは人間を食うようなどう猛な魚（水中動物）とされているのである。

八、「鰐」はワニかスッポンか？

『和名抄』または『倭名類聚鈔』とよばれる書物がある。平安時代中期の承平年間（九三一～九三八年）に勤子内親王の求めに応じて源順（みなもとのしたごう）が編纂したもので、当時から漢字の和訓を知るのに重宝されたという。

現存する『和名抄』では、「鰐」について次のように書かれている。

「鰐　麻果切韻云鰐　音萼和名和仁　似鱉有四足喙長三尺甚利齒虎及大鹿渡水鰐擊之皆中斷」

ここに「鱉」（ベツ）とはスッポンのことである。

この文章の原典は、中国の『文選』（もんぜん）（注6）という書物に収録されている左思の『三都賦』（注7）にある注の中の次の文章と考えられている。

「鰐魚長二丈余、有四足、似鼉、喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡水、鰐擊之皆中斷。」

余談ながら、左思は三世紀後半の中国西晋の文学者で、彼が著した『三都賦』は当時大変な評判を呼んで人々が争ってこれを筆写したため、洛陽城内での紙の値段が高騰したという逸話から、後に「洛陽の紙価を高からしむ」という故事が生まれたという。

こういうことからみて、この『三都賦』は、後々までよく読まれた著作であったと考えられる。

ところで、ここにある「鼉」（ダ・タン）は、『説文解字』十三下に「蜥易（セキエキ）に似たり、長さ丈ばかり。」とあり、爬虫類のワニのことを意味していると考えられる。

『説文解字』というのは、後漢の許慎（きょしん）が紀元一〇〇年に作成した最古の部首別漢字字典で、各漢字の本義を解説している書物である。

中国にはヨウスコウアリゲーターという淡水性のワニが生息している。

ワニの研究者である青木良輔氏によれば、第二次大戦後その数が急減して現在は絶滅危惧種に指定され、安徽省あたりに分布が限定されているが、昔は揚子江流域の池沼や水田などに普通にみられたワニだったという。（注8）

そうして、青木氏はこの「鼉」（ダ・タン）というのがヨウスコウアリゲーターのことであるという。

さて、原典である『三都賦』の注では「鼉」（ダ・タン＝ワニ）とされていたものが、現存する『和名抄』では何故か「鱉」（ベ

ツ＝スッポン）になってしまっている。

ワニもスッポンも、ともに爬虫類に属するとはいえ、全く違う動物である。

『和名抄』作成当初は『三都賦』の注の通り「鼉」（ダ・タン）と書かれていたものが、筆写を繰り返しているうちに、誤って「鱉」（ベツ）にすり替わってしまったのではなかろうか。

ここでもう一度、第二章に述べた『和漢三才図会』に戻ってみてみよう。

『和漢三才図会』の「鰐」の図の説明には、「『和名抄』に、鰐の形は蜥蜴（とかげ）に似ていて大きく、水にくぐって、人を呑むと浮き上がる」とある。

この文言は現存する『和名抄』とは全く異なっており、『和名抄』には色々な異本があったことが察せられる。

「鰐」の正字とされる「蟒」の文字について『説文解字』十三上には「似蜥易長一丈水潛呑人即浮」とあり、この文章がこの『和名抄』の異本には引用されている。

鰐は水中で嚥下することが苦手なので、「人を呑むと浮き上がる」というのは鰐の習性をよく表した記述である。

結局、現存する『和名抄』でも、また『和漢三才図会』に引用されている『和名抄』の異本でも、もともと「鰐」という文字は爬虫類のワニ（アリゲーター／クロコダイル）として説明されていたと考えるべきであろう。

九、「鰐」はなぜワニと訓読みされるのか？

漢字には音読みと訓読みがある。

音読みは中国語の発音を真似したものであるのに対して、訓読みは、漢字を字音ではなく、同じまたは似た意味のすでにある日本語（和語）で読む読み方である。

訓読みがあまり使われず、音読みばかりが使われる漢字があるが、それはその漢字が日本に伝わった当時に日本にない概念や事物であったことを意味する。

いくつかの動物の名前について例をあげると、

訓読みされるもの　鼠、虎、兎、羊、猿、犬　など。
（以前から和語があった動物。）

音読みされるもの　麒麟、犀、象、獅子、駱駝　など。
（これらに相当する和語がなかった動物。）

ということになる。

ところで、「鰐」という漢字が我が国に導入された当時、日本では爬虫類の「鰐」はおそらく知られていなかったであろう。

それにもかかわらず、「鰐」という漢字が、何故ガクと音読みされずに、通常ワニと訓読みされることになったのであろうか？

「鰐」という漢字が導入されて、その意味を知った上で、どういう和語をこの文字の訓にするかを考えた時に、ワニという和語がこの文字を読むのに相応しいと思われたからに他ならないであろう。

この時に、ワニという和語がサメ（フカ）という意味に

しか使われない言葉であったとしたら、「鰐」という漢字の訓として「ワニ」という言葉を選ぶことはしなかった筈である。

「ワニ」という和語が、「どう猛な水中動物」の総称として認識されていたからこそ、「鰐」という漢字に対してワニという訓をつけたのであろう。

十、マチカネワニとトヨタマヒメ

以前は、日本にはワニなどは昔からいなかったと考えられていたが、実は日本にもワニはいたのである。

一九四六年に大阪大学豊中キャンパス（豊中市待兼山町）で更新世（三〇～五〇万年前頃）のワニの化石が発見され、マチカネワニと名付けられた。（注9）

前述の青木良輔氏によって、このマチカネワニにはトヨタマヒメイア・マチカネンシスという学名がつけられているが、これはワニの化身のトヨタマヒメと出土地点の待兼山にちなんでつけられた名前である。（注8）

このマチカネワニの大きくて立派な骨格化石は、現在大阪大学豊中キャンパスにある大阪大学総合学術博物館に常設展示されているから、誰でも気軽にこのトヨタマヒメに会いに行くことができる。

このマチカネワニは、クロコダイル科のトミストマ亜科に属し、マレーガビアルに近いものとされているが、今までの研究から意外なことがわかってきている。（注10）

一つには、普通ワニは熱帯や亜熱帯の地域にすんでいるが、マチカネワニが発掘されたのと同じ地層から発見された花粉化石を分析したところ、当時の気候は現在の大阪の気候とほぼ同じ温帯型の気候であったことがわかった。

すなわちマチカネワニは温帯型のワニだったのである。

もう一つ、ワニは淡水にすんでいるものが多いので、マチカネワニも淡水棲だろうと考えられていたのだが、米国アイオア大学のブロシュー博士によると、マチカネワニの仲間には海水棲のものがあり、マチカネワニもそうだった可能性があるという。ヨーロッパ起源のマチカネワニの祖先は、陸伝いではなく、海を渡って日本にやってきたのかもしれない。

このマチカネワニの化石の発見が契機となって、その後日本各地でワニの化石が発見されるようになってきたが、いずれもマチカネワニとほぼ同時代の古いものしか今のところ日本では見つかっていない。（注9）

しかし、中国では事情が違う。一九六三年に広東省順徳市からワニの骨が見つかった。全長七メートル強の巨大なワニで、同じ層準から見つかった土器の年代からみて北宋時代（九六〇～一一二七）のものとされている。さらに一九七三年にも同じ順徳市からワニの骨が見つかっている。前述の青木良輔氏によれば、このワニはマチカネワニか、そうでなくてもその同属の近縁種であるという。（注8）

現在中国に生息しているワニはヨウスコウアリゲーター

ただ一種だけであるが、今から約千年前までは、これとは別にマチカネワニもしくはその近縁種が生息していたというのである。

もしも今、日本においても約千年前のワニの骨が出土したとしたら、今まで永年に亘ってなされてきたワニ論議はすべて根底からひっくり返ってしまうこととなる。

しかし、ここではそのようなことは考えないことにして、議論を進めることとしたい。

十一、「海幸・山幸」説話のワニ

第二章に述べたように、『古事記』の海幸・山幸の説話では、山幸彦（＝ホオリノミコト）の妻のトヨタマヒメが子供を産むことになって、海辺の渚に鵜の羽を葺草にして産殿を造った。そうして、トヨタマヒメは産殿の中で、「八尋和邇に化（な）りて、匍匐（は）ひ委蛇（もこよ）ひき。」ということになった。

この「ハヒモコヨヒキ」という言葉は、いかにも爬虫類の鰐が這い回る様子を示すのに相応しい言葉である。

一方、サメ（フカ）やシャチが、渚に作られた産殿の中で「ハヒモコヨフ」ということは考えられない。

ところで、第四章で西宮一民先生は次のように述べている。

（四D2）海幸・山幸説話における「匍匐（は）ひ委蛇（もこよ）ひき」という表現は、腹這いながらくねくねと蛇行するという意味である。これは出産における女の姿態の常套表現なのであって、爬虫類であることを主張する根拠にはならない。

これに対して、本居宣長先生は、第二章に述べたように、「ハヒモコヨヒキ」について

（二I）「書紀のある注に、産時のなやみのさまを云、と云るは、わろし。」

と述べている。医者であった本居宣長先生の言葉として、この意見を尊重したい。

ところで、私自身は子供を産んだ経験がないので、経験者の方々に尋ねてみたところ、異口同音に、出産時に「ハヒモコヨフ」などということはできないという。

こういうことからみて、これを「出産における女の姿態の常套表現」であるとする考え方には、疑問を感じざるを得ないのである。

ワニはアリゲーターとクロコダイルとインドガビアルとに大別され、アリゲーターには、ヨウスコウアリゲーターやアメリカアリゲーターなどが、また、クロコダイルには、ナイルワニ、イリエワニ、マレーガビアルなどがある。

マレーガビアル、イリエワニ、ヨウスコウアリゲーターはいずれも草で塚巣を作って産卵するが、これは海幸・山幸説話で海辺の渚に葺草して産殿を造ったという物語を連想させる。

イリエワニはワニの中でも最も狂暴な種類に属するが、

非常に分布範囲が広い。東はフィジー諸島、西はモルディブ諸島、南はオーストラリアの南回帰線あたりの海岸域、北はフィリピンやパラオ諸島にまで及び、日本でも八丈島や奄美大島に漂着した記録がある。

イリエワニは汽水や海水にも分布し、外洋にも泳ぎ出る。

このようなことを考え合わせると、海幸・山幸説話におけるワニは爬虫類のワニである。

この説話に出てくるワニという言葉を「どう猛な水中動物」の総称と考えることによって、このワニを爬虫類のワニとして理解することが無理なく可能になるわけである。

今のところ、トヨタマヒメの時代に日本にワニがいたというところまで話を飛躍させるわけにはいかないから、海幸・山幸説話は、もともとは南洋諸島から伝わってきた物語だったのではなかろうかと考えることにしたい。

十二、「因幡の白兎」説話のワニ

『古事記』の「因幡の白兎」の説話では、ワニたちが並んでいる上を兎が数を数えながら渡っていき、今や地上におりようとするとき、兎が「お前は私にだまされたのだよ」と言い終わるやいなや、列の一番端にいたワニが兎を捕らえて衣服（毛皮）をはぎ取った、ということになっている。

山陰地方に住んでいた古代の人達がこの説話を聞いて、ワニとしてどのような動物を頭に描いたであろうか？

日本海側に爬虫類のワニがいたとは今のところ考えにくい。そうすると、サメ（フカ）かシャチを頭に描いたのではなかろうか。

第三章に、

（三B）「ワニ」はフカ（大形のサメ）。西日本では、現在もフカを「ワニザメ」「サメ」と称している。

と記しているが、当時からワニザメという言葉あったのなら、ワニという言葉を聞いてサメ（フカ）を頭に描いたかもしれない。

また、第六章に記したように、シャチが波打ち際の獲物を襲う習性を持っていることを知っていた人ならば、シャチを連想したかもしれない。

これだけのデータでは、「因幡の白兎」の説話に出てくるワニが何であったかを確定することは難しいように感じるが、一応サメ（フカ）かシャチかのいずれかであったであろうということにしておきたい。

なお、上述の「ワニザメ」という呼称についてであるが、サメにはジンベイザメのように体は大きいがおとなしい性質のサメもおれば、ホホジロザメのように人間をも襲う狂暴なサメもいる。「ワニ」という言葉を「どう猛な水中動物」という意味に解釈する立場から言えば、「ワニザメ」という言葉は、ジンベイザメのようなおとなしいサメのことではなく、ホホジロザメのようなどう猛なサメのことを意味することになる。

また、第四章に、西宮一民先生の説として、

（四D1）『出雲国風土記』島根郡・栗江の埼の条で、中海の特産として、「入鹿（いるか）・和邇（わに）・鯔（なまし）・須受枳（すずき）・近志呂（このしろ）・鎮仁（ちに）・白魚・海鼠（こ）・鱚鰕（えび）・海松（みる）」などがある。この「和邇」はサメ（フカ）を想像させるものであって、爬虫類のワニとは思えない。

とある。

この中で、爬虫類のワニはともかくとして、「和邇」はサメ（フカ）だけではなく、シャチをも含めた「どう猛な水中動物」を意味するものと考えることにしたい。

十三、その他のワニに関する説話

以上述べてきたもの以外にも、ワニにまつわる説話がいくつかある。

（十三A）『日本書紀』神代上　第八段
（十三B）『出雲國風土記』意宇郡・毘賣埼の条
（十三C）『出雲國風土記』仁多郡・戀山（したいやま）の条
（十三D）『肥前國風土記』佐嘉郡の条
（十三E）『因幡國風土記』逸文

などである。

これらに出てくるワニについても、「ワニはどう猛な水中動物の総称」という考えを念頭において、読者自らこのワニが何であるか、考えて戴ければ幸いである。

十四、おわりに

従来、記・紀や風土記などに現れるワニについては、これをただ一種類の動物の名前であるとする前提のもとに、色々な説が主張されてきた。

特に現在では、ワニはサメ（フカ）であるという説が主流を占めているが、その場合、因幡の白兎の説話にあるワニについてはこれを認める人でも、海幸・山幸の説話にある産殿のワニについては、これをサメ（フカ）と考えることにはどうしても違和感を覚えるのではなかろうか。

そこで、今回はワニという言葉を、ただ一種類の動物の名前であるとするのではなく、これを「どう猛な水中動物」全般を指す総称と考えることにして検討を進めた。

その結果、

○海幸・山幸の説話にある産殿のワニについては、爬虫類のワニ。
○『壱岐国風土記』逸文にあるワニについては、シャチ。
○因幡の白兎の説話にあるワニについては、サメ（フカ）またはシャチ。

というように、それぞれの説話の内容に相応しい動物を無理なく選定し、素直に納得のいく結果を得ることができた。

従来からの主流であった「ワニはサメ（フカ）である」とする説とは全く異なる基盤にたった主張であるので、拙論にとまどいを感じる方もおられようが、この拙論に対するご指導・ご批判を頂戴できれば幸甚である。

【参考】

（注1）西宮一民「「和邇」とは何か」『古事記の研究』おうふう　平成五年十月

（注2）大山元『知ってびっくり！　古代日本史と縄文語の謎に迫る』きこ書房　二〇〇一年七月（後に、『古代史料に見る縄文伝承』と改題）。この書物を参照できない場合は、その代わりにインターネットで左記のＵＲＬを参照願いたい。

http://www.dai3gen.net/sirousagi.htm

http://www.dai3gen.net/shachi_na.htm

（注3）エリック・ホワイト　佐藤晴子訳『オルカ入門』どうぶつ社　一九九九年五月

（注4）野本政宏『西海の鯨物語』郷ノ浦町壹岐郷土館　平成一四年一月

（注5）ポルトガル語での書名は、〝Vocabvlario da Lingoa ㊙ de Iapam com Adeclaração em Portugues〟（ポルトガル語で説明を付けた日本の言語の辞典）。

この中でワニについては、ポルトガル語で次のように書かれている。

〝Vani〟〝Peixe aßi chamado que dize come gente

（注6）『文選』（もんぜん）は、中国南北朝時代、南朝梁の昭明太子（蕭統。五〇一～五三一年。梁の初代皇帝である武帝の長子。）によって編纂された詩文集。隋唐以前の文学作品の多くを網羅している。

『文選』の注として最も代表的なものは六五八年に高宗に献呈された「李善注」である。

『文選』は古くから日本にも伝わり、すでに奈良時代には貴族の教養として必読の書となっていた。

（注7）左思（生没不詳。一説には、二五二～三〇七年頃）の『三都賦』は、魏・呉・蜀の三国の都を題材にして作ったもの。拙稿本文中に紹介した鰐魚についての文章は、この中の『呉都賦』（李善注）からとったものである。

（注8）青木良輔『ワニと龍』平凡社新書　〇九一二〇〇一年五月

（注9）野田道子『ねむりからさめた日本ワニ』ＰＨＰ研究所　一九九六年九月　小学中級以上向　マチカネワニの発見のいきさつを探偵小説風のタッチで興味深く記している。巻末にある「日本のワニ化石産出一覧表」は専門のワニ研究者にとっても貴重な参考資料となっている。

（注10）小林快次・江口太郎『巨大絶滅動物　マチカネワニ化石　恐竜時代を生き延びた日本のワニたち』大阪大学総合学術博物館叢書5　大阪大学出版会　二〇一〇年六月

【第18期会費前納のお願い】

本誌は科学の大衆化のために、研究者とアマチュアを結ぶことを目指している雑誌です。

本誌は会員制で、期会費（購読料）は一年分四冊で年四千円（含送料）です。バラ売りの場合は一冊一五〇〇円です。69号から第18期に入っています。本誌は会費前納制を目指していますので、第18期（第69～72号）会費の納入を宜しくお願いいたします。その際些少なりともご寄付をいただけると有難いのです。封筒宛名の後ろに書いてある数字が会費の納入状態を表しています。「72」と書いてあれば、第18期前納済みです。

購読を中止される方は、その旨を中村修まで郵便（葉書など）またはメールでご通知下さい（電話・口頭不可）。購読中止の連絡のない限り、一期（一年間）に限り本誌を発送し、請求書を送ります。

本誌を新たにお求めの方は振り込み用紙に住所・氏名・電話番号・「18期会費」と明記し、会費（購読料）四千円を本号奥付記載の送金先（郵便口座）へお振り込み下さい。第18期途中で入会された場合、第69号に遡って『古代史の海』をお届けいたします。

これを機会に、研究者・アマチュアを問わず新規ご購読の方をお待ちしています。

編集・経営委員会代表　中村　修

古代日本海文化改題

古代史の海　第69号

２０１２年９月20日発行

定　価　１５００円

会費・年間（４冊）４０００円（送料込み）

編集顧問　白崎昭一郎

編集・経営委員会（代表　中村　修）

中村　修・半沢英一

スタッフ　中井かをり・河野宏文

発　行　「古代史の海」の会

〒６１５－８１９４

京都市西京区川島粟田町22　中村修方

ＴＥＬ　０７５－３９２－３７４３

メール　kodaishinoumi@yahoo.co.jp

郵便振替口座

００９２０－０－１７９９１７「古代史の海」

ウェブサイト

http://www.k5.dion.ne.jp/~pan/kodaishinoumi/

制作協力　株式会社ビレッジプレス